

創世記16-17章 「肉の子孫と約束の子孫」

1A 自分の肉による子孫 16

1B 女奴隷ハガルによる子孫 1-6

2B 苦しみを聞かれた神 7-16

2A 神の約束による子孫 17

1B 多くの国民の父 1-8

2B 契約のしるし 9-14

3B サラからの子孫 15-21

4B 一家の割礼 22-27

本文

創世記 16 章を開いてください。16 章は 15 章からの続きです。アブラムには、子が一人も与えられていなかったのに、星の数のように多くなると主に約束されていました。彼はあきらめていて、自分のしもべが跡取りになると思っていました。主がそう約束されたのです。それで彼は、主を信じました。その信仰によって、彼は義と認められたのです。

1A 自分の肉による子孫 16

1B 女奴隷ハガルによる子孫 1-6

ところが、妻サライは不妊のままです。それで彼女は、アブラムに以下のように願います。

¹ アブラムの妻サライは、アブラムに子を産んでいなかった。彼女にはエジプト人の女奴隷がいて、その名をハガルといった。² サライはアブラムに言った。「ご覧ください。主は私が子を産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。おそらく、彼女によって、私は子を得られるでしょう。」アブラムはサライの言うことを聞き入れた。

午前礼拝でも話しましたが、これは当時の体外受精の方法です。妻が不妊であれば、その女奴隷を代理母にして、そこから生まれた子を自分の子とするということです。ですから、妻サライが夫に願ったのは、当時の慣習からすれば不道德なことではありません。

しかし、霊的にはとんでもない間違いだったのです。彼女としては、「夫が主から、自分から生まれる子から、数えきれない子孫が与えられると約束された。ところが、私はその責任を果たせていない。主が、私を不妊にしておられるのだから。だから、女奴隷を使って、夫に子を産んでもらうしかない。」と考えたのでしょう。一見、理にかなった、もっともな考えに見えます。しかし、それは「自分のせいで、夫は神の約束が果たせていない。だから、私のほうから申し出なければいけない。」

ということなのです。

ここに、信仰が働いていないのです。アブラムは、主が語られたことを信じました。それで義と認められたのです。主を信じ、主の言われることを信じ、主のなされることを受け入れます。それは神の完全な計画であり、そこに私たちが何か付け足すことはできないし、してはいけないのです。御霊で始まったことを、肉で完成させようとしてはいけません。神のなされていることを、何か補充しなければいけないかのように、働きかけてはいけないのです。

そして、ここでいけないのは、アブラムが夫として、リーダーシップを発揮していないことです。これは、アダムが犯した罪でした。エバの言っていることを聞いて、主から言われていたのは自分なのに、そのことと反対のことを行ったのです。ここでも、主の約束を聞いたのはアブラムです。サラは、アブラムから伝え聞いたからです。彼は「いや、私はそんなことを神からしなさいと言われていない。」と、きちんと答えてあげるべきだったのです。

³ アブラムの妻サラは、アブラムがカナンのに住んでから十年後に、彼女の女奴隷であるエジプト人ハガルを連れて来て、夫アブラムに妻として与えた。

十年後とありますが、ハランを出たときが七十五歳ですから、今は八十五歳です。そしてサラは、七十五歳です。

そして、ここで注目したいのは、ハガルがどこから来たか？であります。アブラムがエジプトに下った時に得た女奴隷です。世のものを、信仰の家に取り入れていました。私たちが、主からのものではなく、自分の肉によってやる時、世にあるものを使います。お金があれば、お金を使うでしょう。自分の能力があれば、それを使うでしょう。目的が良ければ手段が問わないようなことを、私たちはしてよいでしょうか？しかし、肉によって完成させようすると、必ず肉の行いが露わにされます。

⁴ 彼はハガルのところに入り、彼女は身ごもった。彼女は、自分が身ごもったのを知って、自分の女主人を軽く見るようになった。

女奴隷は、身ごもった子について何ら自分には権利がありません。自分が母になることは、できません。けれども、それは所詮、無理というもの。自分の腹を痛めて生んだ子が、自分の子ではないと言われても、そんなことはありません。子を産む女と、そうでない女は、歴然とした差があります。当時は、不妊の女は恥そのものでした。ですから、サラは自分の女主人なのに、見下げるようになったのです。これだけでは収まりません。

⁵ サライはアブラムに言った。「私に対するこの横暴なふるまいは、あなたの上に降りかかればよ

いのです。この私が自分の女奴隷をあなたの懐に与えたのに、彼女は自分が身ごもったのを知って、私を軽く見るようになりました。主が、私とあなたの間をおさばきになりますように。」

サライは、アブラムをなじりました。アブラムとハガイの間に、当然ながら直接のつながりができました。サライを乗り越えて、まるで夫と妻の関係であるかのようにハガルはふるまったのです。それで、サライは、今回の決断について、主が二人の間を裁かれるようにと問い詰めています。夫婦の間に亀裂が走りました。

⁶ アブラムはサライに言った。「見なさい。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。あなたの好きなようにしなさい。」それで、サライが彼女を苦しめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った。

アブラムは、さらに間違いを犯しています。彼が一家のかしらであるべきなのに、サライにハガルのことを丸投げしています。サライは、当事者ですから感情が入っています。だから、必要以上に女奴隷を苦しめています。アブラムは、ここに介入すべきだったのに、それを怠っています。こうして、女主人と女奴隷との間にも亀裂が走りました。

いかがですか、夫婦の関係もおかしくなり、主人と奴隷の関係もおかしくなり、切り離されました。覚えていますか、アダムとエバも、罪を犯した後に責任をなすりつけ、男と女の結びつきに競争が生まれてしまいました。

これが、神の働きなのに、自分たちでお手伝いしよう、成し遂げようとしたことによる、肉の行いなのです。午前礼拝でもお話ししました、ガラテヤ人への手紙では、異邦人である彼らが、何か自分自身がまだちゃんとできていないとみなし、偽教師たちに惑わされて、ユダヤ人になるための努力をしたのです。割礼を受けて、安息日や祭りを守り、種々のおきてを守りはじめたのです。けれども、その結果、互いに、かみついたり、食い合ったりしていました。まさに肉の行い、すなわち、敵意や争い、そねみなのです。

2B 苦しみを聞かれた神 7-16

しかし、主はアブラムを祝福するという約束をしておられました。この肉によって子孫が与えられるのですが、その子孫も増し加えると約束されるのです。

私たちは、とかく、自分が失敗すると、主は自分への祝福の約束は、反故にされる、取りやめられると思ってしまいます。けれども、そうではありません。私たちの行いに関係なく、神はその信仰によって私たちに祝福しようと決めておられます。それが、神の契約です。それは、もちろん、自分のしたことの刈り取りをしないという意味ではありません。肉によって動けば、その行いの実は表れます。ちょうど今、ハガルが思い上がった、サライとアブラムが夫婦喧嘩をした、そしてサライが

ハガルを苦しめたという結果があります。また、アブラムがエジプトに下っていなければ、そもそもハガルはそこにいなかったのです。しかし、そのような結果の中でも、主は決してお見捨てにならず、その不完全な中にあっても憐れみをかけ、祝福の恵みを下さるのです。

⁷ 主の使いは、荒野にある泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけた。

アブラムたちのいるヘブロンから、ハガルは、故郷エジプトに戻ろうとしています。シュルとは、地中海沿いにある、今のエジプトのスエズ辺りにある地域です。そこに行こうとしています。荒野です。そこに泉がありました。もちろん水を飲むためにハガルがそこにいました。

そこに現れたのが、「主の使い」です。旧約聖書には、しばしば、主の使いが現れますが、どう見ても、主ご自身といっしょではないか？と思われる記述になっています。ここではハガルが、「16:13 私を見てくださる方のうしろ姿を見て、なおも私がここにいるとは」と言っているのです。主ご自身を見たと言っています。そこで思い出すのは、主イエスのことばです。「わたしを見た者は、父を見たのです。」主なる神と一つであられる方が、ここに現れているのではないかとみなすことができます。ベツレヘムで赤ん坊としてお生まれになる前、肉体を持つ前のキリストの御姿と見る人たちが多いです。

そして、この方が「彼女を見つけた」とありますね。捜していたけれども、見つけたというように聞こえますね。迷った羊を捜した羊飼いの喩えを思い出します。苦しみの中にいる一人一人に、主イエスは私たちを気遣って、心配して、見つけてくださいます。

⁸ そして言った。「サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか。」すると彼女は言った。「私の女主人サライのもとから逃げているのです。」⁹ 主の使いは彼女に言った。「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」

なんと優しい方なのではないでしょうか！優しく諭し、またやり直せるようにしてくださっています。今度は、身を低くしなさいということです。その上で、次の祝福の約束をくださいます。

¹⁰ また、主の使いは彼女に言った。「わたしはあなたの子孫を増し加える。それは、数えきれないほど多くなる。」

彼女は、アブラハムの子を産みます。だから、その祝福があります。子孫が、数えきれないほど多くなります。

¹¹ さらに、主の使いは彼女に言った。「見よ。あなたは身ごもって 男の子を産もうとしている。そ

の子をイシュマエルと名づけなさい。主が、あなたの苦しみを聞き入れられたから。

イシュマエルは、「神は聞かれる」という意味です。主は、私たちの苦しみの声を聞かれます。

¹² 彼は、野生のろばのような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼は、すべての兄弟に敵対して住む。」

これは、イシュマエルの子らの中での特徴となります。「25:18 イシュマエルの子孫は、ハビラからシュルまでの地域に住んだ。シュルはエジプトに接し、アッシュルへの道にあった。彼らは、すべての兄弟たちに敵対していた。」

そして、イシュマエルの子孫が、今のアラブ人であると言われています。後のイスラム教のコーランにも、イシュマエルがアブラハムからの子で、大切な預言者で、アラブ人の父祖とされています。今のアラブ人は、アラブ語でつながっており、必ずしも遺伝的にイシュマエルの子孫とは限りませんが、けれども、民族的、宗教的なつながりとして、自分たちはイシュマエルにつながり、そしてその父は、アブラハムとしています。

アラブ人は、アラビア半島を中心に遊牧民として生きてきました。そこにある特徴は部族主義です。部族ごとに分かれていて、しばしば部族間の抗争があります。分かりやすいのが、かつての映画、アラビアのロレンスです。自分の井戸を勝手に飲んだということで、たやすくそのものを殺します。そして、ロレンスが、アラブ人としてまとめて、アラブ民族主義を高揚させようとはしますが、近代的な議会は部族間の争いですぐに解散する場面が出てきます。

そして、ユダヤ人は同じアブラハムを父祖としている兄弟です。兄弟だからこそ、アラブ人は、ユダヤ人とイスラエルを敵視しています。ここに書かれているとおりです。けれども、思い出してください、カナン人に対する呪いをノアは宣言し、事実、忌まわしい行いをして神に裁かれますが、それでも、エリヤとかかわるやもめ、またイエスが娘を悪霊から追い出したカナン人の女がいましたね。主は、アラブ人にも平和の思いを与え、ユダヤ人を尊ぶ人々も多いですし、何よりも、キリストを信じるアラブ人は、イスラエルへの愛は深いです。

¹³ そこで、彼女は自分に語りかけた主の名を「あなたはエル・ロイ」と呼んだ。彼女は、「私を見てくださる方のうしろ姿を見て、なおも私がここにいるとは」と言ったのである。¹⁴ それゆえ、その井戸はベエル・ラハイ・ロイと呼ばれた。それは、カデシュとベレデの間にある。

「エル・ロイ」は、「私を見てくださる神」という意味です。

¹⁵ ハガルはアブラムに男の子を産んだ。アブラムは、ハガルが産んだその男の子をイシュマエルと名づけた。

アブラムは、ハガルから、主の使いが与えた名であると教えたことでしょう。それでアブラムがその通りに名づけています。

¹⁶ ハガルがアブラムにイシュマエルを産んだとき、アブラムは八十六歳であった。

すなわち、アブラムが、八十五歳の時にハガルのところに入りました。それだけでもすごいですが、神は、完全に彼自身も更年期に入り、精子が出て来なくなっている時、そしてもちろん、サライも更年期を過ぎていて、子宮は子を産むことができなくなっている時を待ちます。次の節、17 章 1 節に、アブラムが九十九歳の時に語られ、彼とサライの間に子ができると宣言されるのです。

何をして、そこまで主は、望みえない時に望みを抱かせることをずっとさせるのでしょうか？第一に、キリストが来られるのは女の子孫だからです。人を罪に誘い込み、神から切り離れた悪魔のしわざを砕くため、キリストは来られます。そのキリストを、女の子孫からと決めておられるからです。そして、生めよ、増えよ、支配せよという祝福命令を、新たな国民によって実行されるためです。

そして最も大事なものは、主は、いのちを与え、死んでいるのにそれでも生き返らせる、復活の神であることを示されるためです。神が、キリストを死者の中からよみがえらせました。そのことを示すために、全く、子を産むことのできないところに子をくださるのです。(ロマ 4:22-23 参照)

2A 神の約束による子孫 17

1B 多くの国民の父 1-8

¹ さて、アブラムが九十九歳のとき、主はアブラムに現れ、こう言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。² わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたを大いに増やす。」

イシュマエルを生んでから 13 年後に、主が再び現れました。契約を結ばれるためです。これまでも契約を結ばれましたが、さらに大いなる約束をされます。さらに、契約を確認するためのしるしをくださいます。かつて、ノアと契約を結ばれた時に、虹が大洪水を再び起こさないしるしとなったように、です。

主は、ここで、「全能の神」エル・シャダイとして現れます。シャダイが、実は乳房の意味から来ています。生まれたばかりの赤子が、母から乳を飲んでいる姿です。そこで主が示されているのは、アブラムが自分の力のできることなど、何一つない。赤子が母親から乳を飲むように、自分は抱か

れ、ただ主から養われるだけなのだということです。これが神の約束であり、自分の肉によって神の約束を実現することなどおこがましいということです。神は全能の力を、信じる者たちにこのようにして働かせるのです。

次に、「あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われます。アブラムは、主に後押しされて、主の前を歩んでいました。ウルの町から出て、カナンの地に来ました。そこに住んでいます。ところが、子を生むことについては、つまずいていたのです。そこで、信仰の歩みをやめていたのです。イシュマエルを生み、彼はすでに13歳になりました。今、ユダヤ人の間では男の子が13歳になると、バル・ミツバと呼ばれる成人になった儀式を行います。ここで、主に後押しされる歩みがまだ終わっていないよ、全き者になりなさい。信仰の歩みを貫徹しなさいということです。

私たちも、適当に自分の思いで信仰生活を繕い、現状維持で満足していることはないでしょうか？主イエスは、アブラムに言われたように、弟子たちに対して、「マタイ 7:48 **あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。**」と言われました。まだ、自分は到達していないのだよ、ということを教えますね。主は完全な方です。そして完全な主が、不完全な自分に完全に働いてくださいます。不完全なのにも関わらず、私たちが完全な方を受け入れ、信じることを通して、恵みに拠って働いてくださいます。その信仰による従順の生活を全うする必要があるのです。

パウロが、このことを競走に例えて、こう語りました。「ピリ 3:12-14 **私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、14 キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるとい、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。**」

³アブラムはひれ伏した。神は彼にこう告げられた。

アブラムは、ひれ伏しています。顔を上げられないぐらい、倒れています。これが、聖書に出てくる礼拝の姿です。

⁴「これが、あなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。⁵ あなたの名は、もはや、アブラムとは呼ばれない。あなたの名はアブラムとなる。わたしがあなたを多くの国民の父とするからである。⁶ わたしは、あなたをますます子孫に富ませ、あなたをいくつもの国民とする。王たちが、あなたから出てくるだろう。

これまで、主はアブラムに、彼が大いなる国民になるという約束をしていました。それだけでも、

子どもがいない彼にとっては、途方もない約束でした。ところが今、ここで「多くの国民の父」とすると言われるのです。イシュマエルからも民が出ます。そして後のイサクから、ヤコブだけでなくエサウが生まれ、そこから国民が出ます。サラの亡き後、アブラハムはケトラを妻に迎え、数多くの子が生まれ、そこから国民が出てきます(25:1-4)。そして何よりも、血縁の子孫イスラエルからキリストが出て、キリストによって、信仰によるアブラハムの子が出てきます。そうです、私たちです。

「王たちが、あなたから出てくるだろう」と、主は言われます。今、言ったそれぞれの子孫と民族から、王たちは出てきます。また、イスラエルの国民も王たちが出てきます。それだけでなく、ここには一つのバージョンアップがあります。それは、アブラハムの子孫は、王として召されているということです。イスラエルの国民は、「祭司の王国」としての召しを受けました(出 19:6)。そして、キリストにある者たちは、異邦人も含めて、祭司また王になることが預言されています。「黙 1:6 また、ご自分の父である神のために、私たちが王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。」

そして、名前がアブラムからアブラハムに変えられています。アブラムは、「高貴な父」という意味です。アブラハムは、「多くの父」という意味で、多くの国民の父という意味になります。後で、サラもサラに変えられます。サライは「王女」という意味です。サラには、意味がありませんが、違いは、ヘブル語のヘイ(ה)が入っていることです。これは、神の息の音でもあります。「詩 33:6 【主】のことばによって天は造られた。天の万象もすべて御口の息吹によって。」彼らに、神の息吹き、霊が吹きこまれているという意味合いが、その名前にはあるとも考えられます。¹

つまり、アブラハムは、肉の子孫ではなく、神の約束を信じて、御霊によって子孫を持たないといけないということです。サラも、肉によって、女奴隷ハガルによってではなく、神の約束によって、御霊によって子を宿さないといけないということです。

⁷わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。⁸ わたしは、あなたの寄留の地、カナンを、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」

これは、イスラエルの民に対する約束です。主が強調しているのは、「永遠」ですね。今すぐのことではなく、これからずっと代々に渡って与えられた契約です。そして、個人的に神となったださいます。「あなたの神、あなたの後の子孫の神となる」と言われています。そして最後に、カナンの地について、今は寄留しているが、永遠の所有とするとされています。

¹ https://www.hebrew4christians.com/Grammar/Unit_One/Aleph-Bet/Hey/hey.html

これは、キリストの地上への再臨で完成します。けれども、ここからはっきりわかるのは、土地所有の約束は今も有効だということです。ですから、今のユダヤ人に、あのパレスチナの土地は関係ないのだという意見が教会にあるのは、私には理解ができません。パレスチナ人のナラティブ、すなわち歴史の見方で、クリスチャンまでが、「イエスにあって、イスラエルは関係ないものになった」と言っているのが、びっくりします。イスラエルというものを、すべて神のご計画から外してってしまうのです。しかし、この約束は代々受け継がれているもので、永遠の所有なのです。

2B 契約のしるし 9-14

⁹ また神はアブラハムに仰せられた。「あなたは、わたしの契約を守らなければならない。あなたも、あなたの後の子孫も、代々にわたって。¹⁰ 次のことが、わたしとあなたがたとの間で、またあなたの後の子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中の男子はみな、割礼を受けなさい。

主は祝福の約束をくださいました。契約を結んでくださいました。その契約のしるしとして、つまり確認の印として、割礼を受けなさいと命じておられます。(ロマ 4:11 参照) 契約を結ぶのだが、そこに印鑑を押しなさいということです。この契約が永遠なので、印も永遠です。なので、今でもユダヤ人の人たちは、割礼を受けます。

¹¹ あなたがたは自分の包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたの間の契約のしるしとなる。¹² あなたがたの中の男子はみな、代々にわたり、生まれて八日目に割礼を受けなければならない。家で生まれたしもべも、異国人から金で買い取られた、あなたの子孫ではない者もそうである。¹³ あなたの家で生まれたしもべも、金で買い取った者も、必ず割礼を受けなければならない。わたしの契約は、永遠の契約として、あなたがたの肉に記されなければならない。

割礼とは、性器の包皮の部分を切り取ることです。八日目の割礼は、モーセの律法でも定められました。割礼式が、ユダヤ教の中にあります。けれども、今でもアメリカなどでは、衛生面の理由から赤ちゃんに割礼を受けさせることが多いです。

そして大事なのは当時、割礼の習慣が、他の民族でもあったことです。けれども、同じ時代のエジプトでは、王家や高官が割礼を受けている記録なのです。²ところがここでは、アブラハムのすべてのすべての家の者たちが受けるということなのです。これは、斬新です。アブラハムの家に属していれば、それがいくら奴隷であっても、異国人の奴隷であっても、王家の者として数えられるということです。これがまさに、キリストにあって私たちは神の子どもであり、神の家族に入れられており、それで王であり祭司であるということにつながります。

² https://www.researchgate.net/publication/291332614_Ancient_Egyptian_royal_circumcision_from_the_pyramid_complex_of_Djedkare

今、私たちが当たり前のように持っている人権であるとか、尊厳があります。聖書の世界では、実はイスラエルの民に対して、主が与えているものであり、当時は王や高官だけが持っている権力だけでした。それを、主の契約の民だということだけで、すべての人に与えられているというのが、聖書のメッセージなのです。逆にいうと、今、私たちに与えられている人権とか尊厳について、神から引き離すことはできないということです。

¹⁴ 包皮の肉を切り捨てられていない無割礼の男、そのような者は、自分の民から断ち切れなければならない。わたしの契約を破ったからである。」

契約の民であることのしるしは、ここにあるようにとても厳しいです。なぜ、わざわざ男子の性器の包皮が、そんなに大事なのか？女の子孫の約束を思い出してください。その子孫は子種という意味合いがあります。すなわち精子です。自分から出てくる子は、神の契約の民に入っているのだということを、切り取られた自分の性器を見ることによって思い起こすのです。

けれども、神との契約は、主が語られ、そのことばを聞いて、生き、そして信じて生きていくという、いのちの関わりが大前提です。主の言われることを聞いていないのであれば、形として割礼を受けていても、心に割礼を受けていないことになります。ちょうど、男性の性器が、包皮におおわれて、鈍感になってしまっているように、主の御霊によって語られる声に対して鈍感になっている姿、心の頑なさを、心の包皮と表現します。モーセが民に言いました。「申 10:16 あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。」

それで使徒パウロは、ユダヤ教ラビとして、こう言いました。「ロマ 2:28-29a 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではないからです。29a かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。」

それから、義と認められることについて、ユダヤ人たちが異邦人が救われなかったのは、割礼を受けていなければ、断ち切られるという言葉があったからです。パウロは反論します。アブラハムは、割礼を受ける前に、信仰によって義と認められたのです。彼が、夜空の星を見て、主があなたの子孫はこうになると言われて、主を信じた時に、その信仰が義と認められました。無割礼であった時に義と認められたのです。ですから、異邦人が救われるために、割礼を受けて、それで義と認められるのではなく、無割礼のまま、信仰によって義と認められます。(ロマ 4:9-12)

3B サラからの子孫 15-21

そして、主からアブラハムに対して、衝撃発言が来ます。

¹⁵ また神はアブラハムに仰せられた。「あなたの妻サライは、その名をサライと呼んではならない。

その名はサラとなるからだ。¹⁶ わたしは彼女を祝福し、彼女によって必ずあなたに男の子を与える。わたしは彼女を祝福する。彼女は国々の母となり、もろもろの民の王たちが彼女から出てくる。」

これまで、アブラハムに語られていた神の約束です。サラは不妊だったので、彼女をその約束の中に数えていなかったのです。ところが、今、自分の名がアブラムからアブラハムになったように、サライをサラにして、ヘブル語「ヘイ」を入れたのです。そして、同じように国々の母となり、王たちが彼女から出てくるとされたのです。

¹⁷ アブラハムはひれ伏して、笑った。そして心の中で言った。「百歳の者に子が生まれるだろうか。サラにしても、九十歳の女が子を産めるだろうか。」¹⁸ そして、アブラハムは神に言った。「どうか、イシュマエルが御前で生きてますように。」

アブラハムは、ずっと、厳かな主のご臨在の前で、ひれ伏していました。顔を上げておらず、地面に向けながら聞いていました。ところが、その厳かなご臨在の前で、なんと彼は笑っていたのです。百歳になって自分は生殖活動はできない、妻は初めから不妊だったし、更年期はとっくの昔に過ぎている。そしてイシュマエルは成人で 13 歳になっている。この約束がイシュマエルによって、安泰ですということです。しかし、この考えでは信仰は全うされていなかったのです。

¹⁹ 神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼と、わたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。

主は、イサク、「彼は笑う」という名前をつけなさいと言われる。彼がいる旅に、こんなことを主がしてくださったと、笑ってしまうことを思い出させるようにします。主は、死んだもののようにになっているのを、生かす方だということ、イサクの名によって思い起こすのです。イシュマエルは、肉の子孫であるのに対して、イサクは、御霊による子孫、約束の子孫です。

²⁰ イシュマエルについては、あなたの言うことを聞き入れた。必ず、わたしは彼を祝福し、子孫に富ませ、大いに増やす。彼は十二人の族長たちを生む。わたしは彼を大いなる国民とする。

主は、アブラハムを祝福すると約束されましたから、イシュマエルについても彼の願い通りに、祝福していただきます。十人の族長を生むとの約束ですが、25 章 12-16 節に、その十二人の息子の名が列挙されています。

²¹ しかし、わたしがわたしの契約を立てるのは、サラが来年の今ごろあなたに産むイサクとの間にある。」

サラがイサクを産むのは、来年の今ごろと言っていますから、みごもるのは、2-3 か月後ということになりますね。

4B 一家の割礼 22-27

²² 神はアブラハムと語り終えると、彼のもとから上って行かれた。

主は、神の使いのようにいらしたのでしょうか？はつきりと天から下ってこられて、そして彼から離れ、上って行かれています。そして、アブラハムは間髪を入れず、主の命令に従います。

²³ そこでアブラハムは、その子イシュマエル、彼の家で生まれたすべてのしもべ、また、金で買い取ったすべての者、すなわち、アブラハムの家のすべての男子を集め、神が彼に告げられたとおりに、その日のうちに、彼らの包皮の肉を切り捨てた。

自分の息子イシュマエルを筆頭に、主の言われたように、自分の家にいる者、すべてに割礼を施させました。

²⁴ アブラハムが包皮の肉を切り捨てられたときは、九十九歳であった。²⁵ その子イシュマエルは、包皮の肉に割礼を受けたとき、十三歳であった。²⁶ アブラハムとその子イシュマエルは、その日のうちに割礼を受けた。²⁷ 彼の家の男たちはみな、家で生まれた奴隷も、異国人から金で買い取った者も、彼と一緒に割礼を受けた。

その日のうちにと強調しています。そして、しっかりと年齢をモーセは記録しています。アブラハムは九十九歳、イシュマエルが十三歳です。アブラハムが百歳の時にイサクが生まれます。

こうして、主は、信仰によってご自分の、いのちある計画を前進させます。御霊が働かれます。けれども、肉によるものは、主はご自分のものとみなされません。どんなに善意で行ったものも、何一つ数えられません。私たちがいつも、自分の肉の努力ではなく、徹底的に、主の言われていることを信じ、受け入れ、従う者でありますように。